

まいつるパート II

令和5年度 No.15 校長室だより

通算No.33 (R5. 12. 15)

霧島市立国分小学校長

☆ 児童期から思春期にかけて育てたい心の機能～教育心理の視点から～ No.1 ☆

先日、市の校外生活指導連絡会があり、その中で鹿児島大学大学院の仮屋園明彦先生（心理学者）の講演がありました。その要点を数回にわたってお伝えしたいと思います。

○ 発達のとらえる指標としての発達課題

- ・ 乳児期、幼児期、児童期、思春期、青年期、成人期という各発達段階において、人が身につけていかねばならない心の機能（忍耐力、自制心、やり抜く力などの心の力）や体験しておくべき事柄を「発達課題」と呼ぶ。
- ・ 時間の経過に伴い自然と「発達課題」が身につくのではない。
- ・ 体験すべき事柄を、体験しておくべき時に体験しておくことが、「発達課題」の習得につながる。
- ・ 体験しておくべきことを体験せずに、5年、10年と時間だけ経過してしまうと、発達段階にふさわしい中身（心や精神年齢など）が育たなくなる。
- ・ 乳幼児期、児童期の発達課題の体験、習得が不十分だった場合、以後の思春期や青年期にかけての発達課題を乗り越えられなくなり、発達上の歪みや不適応が露呈され、「発達上の積み残し」状態になる。したがって、発達課題の習得という視点から、今の年齢段階で「できていること」「できていないこと」を「見立てる」という姿勢で接する。そのうえで、「できていないことができるようになる」ために必要な体験を与え、その体験を積み重ねる必要がある。

○ 心の機能【忍耐、根気、頑張り、自制心など】の育ち方

- ・ これらの力は放っておいて自然に育つのではない。心の機能は必要に迫られて、実際に使ってはじめて身につく、発達する。
- ・ 使う必要のない心の機能、なくても生きていける心の機能は発達しない。「忍耐力」を使う必要がなければ「忍耐力」は育たない。
- ・ したがって、親が自覚的に子どもに必要な環境と体験を考え、適度な負荷をかけてあげることが必要である。

○ 行動をとおして心を育てる

- ・ 特に児童期や思春期は行動をとおして心を育てる意識が必要である。
- ・ 小中学生の場合は、大人より経験が少ないので、実際に行動することとおした体験の中で心を育てることが重要である。
- ・ 心が行動を育てるのではない。何も経験しないところから心だけが勝手に育つのではない。心の機能は行動してはじめて育つ。行動が心を育てることになる。
- ・ ある哲学者は、「私たちがよく振る舞えるようになるのは、実際に良く振る舞うことを通じてであり、現実態が可能態に先行する」と述べている。これは、「何かが可能になるためには、現実が既になければならない」ということである。ここでの現実という言葉は、実際に行動をとおした経験という意味である。
- ・ あいさつやお礼、整理整頓、がまんすることなども実行することによって身につけていくことになる。

○ 児童期から思春期にかけて経験・習得すべき発達課題

- ①快体験と不快体験 ②けじめ感覚 ③現実のルール ④秩序を保つルール
- ⑤規範・容疑指導・型 ⑥意欲と行動 ⑦抽象的な原理・原則を考える力
- ⑧恥と失敗と傷つきと ⑨自己効力感（自己肯定感）の育成

※ 次回以降、上の①～⑨の詳細について、数回に分けてお伝えします。

学校教育目標「胸を張って堂々と生きる」 青少年赤十字の目標「気づき・考え・実行する」